

アーロン L. ミラー (石井昌幸ほか訳) 『日本の体罰 学校とスポーツの人類学』(共和国、2021年)

松田 太希 (暴力問題相談センター)

本書は、Aaron L. Miller, *Discourses of Discipline: An Anthropology of Corporal Punishment in Japan's Schools and Sports* (Institute of East Asian Studies: Berkeley, CA, 2013) の全訳に加え、原著者ミラー氏による「日本語版への序文」が付された翻訳書である。原書については中澤篤史氏(早稲田大学)による「図書紹介¹⁾」があり、ミラー氏の研究の概要が首尾よくまとめられ、積極的な評価がなされている。本評と併せてご覧いただきたい。

一方、本評ではミラー氏の研究ならびに本訳書への疑義を呈したい²⁾。価値判断を自覚的に抑え、体罰がどのように語られ、扱われているのかを仔細かつ慎重に分析しようとするミラー氏の姿勢を評者は高く評価したいのだが、議論の終盤でミラー氏は深刻な矛盾を露呈し、その研究の真価を自ら台無しにしている。また、原書が出版される前、ミラー氏は本書の内容と対立的と言っていほど強硬な体罰否定の姿勢を示していたのだが、そのことへの言及が無く、訳者による説明も無い。それらの点で、評者は本書をどう受けとめればいいのか戸惑っている。

＊

まず、ミラー氏が日本の体罰に関心を持ったきっかけには彼が実際に体罰を目撃した体験がある。

2000年代初めに日本のある保守的な地方の県で英語教師をしているときに、規律訓練のための実力行使を見て、体罰に興味を持った。なぜなら、それは日本の学校では違法なはずなのに、教師やコーチのなかにはむしろこれ見よがしに体罰を用いる者がいたし、彼らはまるで自分は生徒を正しく導いているのだ、とでもいうかのように誇らしげだったからである。体罰の使用が法律ではっきりと禁止されているにもかかわらず、そのような教師たちが体罰を用いることに、当時の私は困惑した³⁾。

しかし、日本人が体罰の違法性を知らない人ばかりではなく、また、学校とスポーツが重要な教育＝規律訓練の場であることを理解するにつれて、ミラー氏は日本の体罰の状況の複雑さに気づき、態度を変容させていく。

当初は体罰に反対していたのだが、研究の初期段階で他文化の「卑しむべき」実践の善悪を判断しようとする自分の傾向を、研究効果を担保するためにはむしろ抑えねばならないのだと悟った。このことが、本書のなかで筆者が体罰の実践をめぐる賛否両論について批判的に検討しようとした理由である。(…)日本で言う「自分を抑える」ことは、体罰についての研究者全員が努力すべき理想であろうし、さらに言えば、論争の的となるようなデリケートな社会問題に向き合う研究者全員が取り組むべき理想なのである⁴⁾。

こうしたミラー氏の姿勢を、評者は高く評価したい。体罰が深刻な問題であることは論をまたない。しかしそのことは、体罰理解のための冷静な姿勢が蔑ろにされていいという理由には無論ならないのだが、日本人研究者でさえ(?)「日本は集団主義だから」「日本は諸外国と比べて遅れているから」といった態度で一面的・断罪的に体罰を非難する者が決して少なくないのである。評者は、それは説明・批判として威力を持っているように見えても、実際には体罰の理解を妨げていると批判したことがある⁵⁾。

そうした説明・批判の仕方の問題性をミラー氏も捉えており、彼はそれを「文化主義(culturalism)」という表現を用いて批判する。それは、「体罰が見日本文化の特徴であるかのように論じるもの⁶⁾」、「日本文化」を本質化し、それを想像上の実体へと還元するような説明⁷⁾」のこととされている。例えば、「厳しい上下関係」が日本に特有な体罰の原因として指摘されることがしばしばあるが、「厳しい上下関係」は程

度の差こそあれどこにでも見られるのであり、それを以て日本の体罰を説明したことにはならないといった単純な説明の仕方への警戒が「文化主義」批判で訴えられようとしていることである⁸⁾。

*

ミラー氏が「文化主義」を批判する背景には、彼が実際に日本で様々な人の声を聞いたことや、欧米における日本(人)研究が日本(人)の複雑さや多様性を見ようとし「西洋中心主義的思考」⁹⁾に陥っているという彼の見立てがある。一方、ミラー氏自身のまなざしは、「体罰が発生してきた歴史的・同時代的な文脈はあまりに多様かつ複雑であり、(…)一つの国においてさえ一般化はできない¹⁰⁾」というものであり、その意味で、「文化主義」も「西洋中心主義的思考」もあまりに短絡的な理解・説明に過ぎないということなのである¹¹⁾。

ミラー氏は、体罰を断罪するのではなく、日本でそれがどのように語られているのかに迫る人類学的なアプローチを採る。その際に彼は、体罰言説の「多重音声性¹²⁾」「多元性¹³⁾」に着目する。それは、体罰が多様な人々によって複雑なコンテキストにおいて語られているという体罰言説の多様性の状況への着目であり、「文化主義」批判からくる必然的な視座だと言えるだろう。

以上のことが踏まえられ、研究目的は次のように設定されている。

本書は、日本の学校とスポーツにおける体罰問題を取り巻く数多くの「規律訓練をめぐる言説」についての研究である。それらの言説には、規律訓練が何を意味するのかと同時に、人びとが規律訓練について議論する際の方法、規律訓練がどうあるべきかについてのレトリックのパターンなども含まれる¹⁴⁾。

評者は人類学を専門としていないが、ミラー氏に体罰の目撃体験があり、聞き取りやフィールドワークも行っているとしても¹⁵⁾、議論の大部分は活字が対象となっており、その点でミラー氏の研究が人類学としてどこまで妥当なのかについて疑問を持っている。しかし、「体罰を実際に見せてほしい」などと現場に依頼することなどできないのだから、現実的な限界があったことはすぐにわかる¹⁶⁾。

そうした限界を抱えながらではあるが、第2章「日

本の体罰史」第3章「体罰とコンテキスト」第4章「倫理」第5章「体罰の原因と文化の複数性」を通して、ミラー氏は多種多様な体罰言説を仔細に検討している。紙幅の都合上その詳細を紹介する余裕はないが、体罰の禁止法制の歴史、定義をめぐる論争、教育観・娯観、「根性」や「勝利至上主義」との関連等が、日本の体罰言説の多様性として描かれ、「文化主義」的な理解や説明の不可能性がよく示されている。ただし、従来の日本の体罰(史)研究で指摘されていることとの重複もあり、日本の読者にとってはさほど目新しい内容ではないかもしれない。また、議論が拡散的で読み難さを感じるが、それは多種多様な体罰言説に言及することの副作用のようなものであり、ミラー氏の研究の価値を貶すものではないとみるべきである。ミラー氏は実際によく調べており、第2章～第5章は、特に明治以降の体罰についての資料として有益なものになっていると思われる¹⁷⁾。日本人研究者でさえ(?)歴史的・文化的・社会的背景を考慮に入れない短絡的な体罰批判を行う者が少なくないので、本書の触発によって慎重な議論が盛んになることを願う。

*

さて、第5章は、「体罰は本質的に日本的な何かのゆえに存在するか、日本文化に固有の何かによって説明できると主張した研究者は多いが、次章でみるように、もっと良い、けれどももっと複雑な解釈が可能なのである¹⁸⁾」と締められている。そして、第6章「権力の言説、言説の権力」に移ると、「学校あるいはスポーツにおける体罰は、フーコーの「生権力」の概念に良くあてはまる¹⁹⁾」ということで、フーコー(Michel Foucault, 1926-1984)の権力論が援用され、次のような姿勢で体罰の解釈が行われ始める。

フーコーの応用、とりわけ「権力関係」、「暴力的関係性」、「生権力」に関して彼の理論を応用することは、日本社会において体罰が「いかに機能するか」をより良く解釈するのに役立つ。すなわち、われわれが体罰について説得力のある「エティック」な説明を切り拓く助けとなるのである。しかし、そのような応用は、体罰という実践を日本人自身がどのように認識しているのかを十分に検討してきたいまこそ、実りあるものとなるはずだ²⁰⁾。

第6章では、主体を生産する機能を持つ規律訓練の一つのモメントとして体罰が解釈されているのだが、しかし評者は、この議論展開に大きな疑問を持つ。なぜなら、「体罰という実践を日本人がどのように認識しているのかを十分に検討してきたいまこそ、実りあるものとなるはずだ」とされているにもかかわらず、それまでの言説分析やそこから窺い知ることができる具体的な状況・実態が考察に活かされておらず、単なるフーコー権力論の紹介程度にしかになっていないからである。言い方を換えれば、そうしたかたちで体罰を解釈するのであれば、それまでの仔細な言説分析はいったい何のためになされたのかという疑問を抱かずにはいられないのである。

評者はそのことを直接ミラー氏に訊ね、「他の研究者の理解を促す意図があった」といった趣旨の回答を得たが²¹⁾、体罰の規律訓練性の理解はまさにフーコーの権力論によって広く促されたものであり、その回答に評者は満足できなかった（ミラー氏自身、フーコーに言及するより前の段階で「規律訓練」というタームを使用しているのである）。ミラー氏の認識が、「フーコーの膨大な知の蓄積が、日本の学校やスポーツにおける教育に関する研究に応用されることはまれであった²²⁾」ということであれば仕方なかったのかもしれないが、日本の体育・スポーツ研究や教育学はそれを無視することができないほどにフーコーの影響を受けており²³⁾、ミラー氏の認識は残念ながら誤っている。

もっとも、かく言う評者もフーコーの権力論に多くを学ぶかたちで「運動部活動における体罰の意味論²⁴⁾」という論考をまとめたことがある。そこでの評者の議論の分析枠組みも第6章のミラー氏と同様にフーコーの権力論から出ていないが、フーコーは日本の体罰の状況をおそらく詳しく知らないのだから、具体的な日本の状況から離れないように努めていた²⁵⁾。逆に言えば、日本の状況をうまく説明できないのであればフーコーから離れるつもりであったし、その方針は今も変わっておらず、今後の研究の展開への可能性でもあっていると考えている。

ミラー氏の着目も、同拙論と同じく、規律訓練の主体生産性についてのフーコーの分析にある。しかし既に述べたように、ミラー氏の論述は大半がフーコーの権力論の解説に費やされ、それまでに検討されていた日本の多様な言説や実態を踏まえた分析がなされておらず、結果的にミラー氏は彼が距離を取っていたはずの「理論先行型のアプローチ²⁶⁾」に近づいてい

る。つまり、「日本の体罰はフーコーを参照した場合このように考えられる」ではなく、「フーコーは体罰をこう解釈している」といった議論になっており、体罰が一元的に解釈されてしまっているのである。「研究の結果そのものに語らせるようにしたい²⁷⁾」と言うとき、ミラー氏は一元的な解釈の提示ではなく、多様な言説の分析を示すことで、日本の体罰の複雑多様な状況を伝えたいと考えていたと思われるが、第6章はそのような内容になっていない。

また、「本書は、フーコーならそうしたのではないかと筆者が考えた方法による、非西洋社会における教育の場面―本書では学校とスポーツ―での規律訓練と処罰についての批判的研究である²⁸⁾」ともされているが、フーコーに従うだけなら死を招くような過激な体罰を理解することはできない²⁹⁾。そうした体罰は、生権力としての規律訓練の域を逸脱し、結果的に主体の生産に失敗しているからである。さらに言えば、フーコーなら、言説分析の後にフーコー権力論で体罰の解釈をまとめあげるようなことはおそらくせず、ディテールにこだわった記述を粘り強く続けたはずである³⁰⁾。

しかし、こうした議論展開になぜミラー氏は向かってしまったのか。その要因を、ミラー氏が先行研究から「文化主義」批判を引き出す場面の中に窺うことができると思われるのだが、そのことの指摘の前に、「文化主義」批判の或る種の罠にミラー氏が陥っていることを見ておきたい。

＊

評者は、「日本の (Japan's) 体罰」という書名を見たとき、「なんらかの日本特殊性が説明されているのかもしれない」という期待を素朴に抱き、本書を手にとった。先述したように、ミラー氏の「文化主義」批判と同様の指摘を行ったことがある一方で、それでもなお諸外国と日本の状況が全く同一のものであるはずがないとも考えており³¹⁾、その点が指摘されているのではないかと期待したのだ。日本人自身ではそうした点を相対化し難いからである。

ミラー氏は、そうした期待を「文化主義的期待だ」と斥けるかもしれない。だが、日本の体罰に日本的な特殊性が全く見られないのかというとそんなことはあるまい。実際にミラー氏も、「異文化を異文化そのものとして理解することが必須³²⁾」「われわれはまず、「他者」を深く研究しなければならない³³⁾」「日本

の「体罰」と英語圏の「コーポラル・パニッシュメント」には違いがあるし、日本人とアメリカ人はいくつかの重要な点で大きく異なるのも事実である³⁴⁾。「スポーツに関わる暴力のなかには、日本が「文化的に暴力的な」傾向を持っていると結論づけたくなる例が実際にある³⁵⁾」と述べており、評者の期待は高まっていた。序章には「日本と外国との違いのより良い理解に向けて³⁶⁾」という項目もある。

だが、ミラー氏はフーコーの参照を終えた後、「もしも体罰を引き起こすものが文化だと言うなら、それは「人類文化」なのだ³⁷⁾」と極端に行ってしまう。「体罰は人類文化だ」という説明は、「文化主義」と同様に明らかに一元的なものである。

もっとも、「文化主義」が人間の行為の説明として不十分であることはミラー氏の独創的発見ではないだろう。「文化主義」が批判されるべき根本は、「文化」に言及することそれ自体にではなく、人間の行為を説明する際に単一のファクターしか想定されず、そこに例えば「文化」が原因として容れられるところにある。つまりそれは、複雑多様なファクターからなる人間の行為(を含めた社会現象)は唯一の原因を指定するだけでは十全な説明にはならないという問題だが、その問題を社会科学はその客観性・科学性を考えるための課題として抱え続けてきている³⁸⁾。ミラー氏はそうした問題に気付いていないのではないだろうか。本書では最後まで「文化主義批判」が繰り返されているのだが、結局のところそれは、上記のような社会科学の課題が単に繰り返されているだけだと見ることもできてしまうのである。そうしたことに気付いていれば、「体罰は人類文化だ」という短絡的な表現になることはなかったのではないだろうか。

＊

ミラー氏が上記のような或る種の矛盾を抱えることになった要因を、彼が、日本(人)研究における「文化主義」の淵源をベネディクト(Ruth Benedict, 1887-1948)の『菊と刀』に認めようとする場面に窺うことができると思われる。

ミラー氏は、「恥の文化」を指摘したベネディクトの研究が、「日本の文化的独自性をめぐる数多くのステレオタイプや文化の違いに関する紋切型³⁹⁾」を「西洋中心主義的思考⁴⁰⁾」として齎したことや、日本人が「ベネディクトが抽出した「本質」をただ喜んで受け

入れ、大いに満足し⁴¹⁾」たことによって「文化主義」的説明が広がったと考えている。しかし、少なくともベネディクト自身はそのような単純な議論を行っているわけではないし、柳田國男がその研究に一定の評価をくだしているように⁴²⁾、細かい事柄が調べられている。だが、柳田は不十分な点もまた指摘しているし⁴³⁾、ベネディクトにも制約があった。しかし、そうであってもなんらかの結論を出さなければならない立場に彼女は置かれていたのである。

もっとも、そのことは具体的な状況に違いこそあれ、現代の学者・研究者も大局的には同じだろう⁴⁴⁾。そうした或る種の宿命をベネディクトが内心どのように考えていたのかを評者が知る由など無いが、ここで理解されておかなければならないことは次のことである。すなわち、「言語」は本性上、「分節」という「力」を発揮することによって機能しており、「言えなかった」ことを必ず生み出す構造的・機能的誤謬を本質的に抱えており、そこから得られる「結論」は常に条件付き的な性格を帯びるしかない、ということである。そのため、「結論」の受け手はそれが「どのような意味で言われているのか」「どのような場合に妥当するのか」といったことを考慮して受けとめる必要がある。逆に言えば、そうしたことが踏まえられないまま「結論」が受けとめられたとき、例えば「文化主義」のような単純な説明の仕方が不用意に拡散していくことにつながるのである。

したがって、ベネディクトが多種多様な考えを見落としているというミラー氏の批判⁴⁵⁾は慎重さを欠いている。世界を「分節」することで機能する以上、「言語」は世界の多種多様性を完全に描くことは原理的にできない。多種多様性は常に取りこぼされるのである(り、まさにそのことによってそれは多種多様性であること現しているのだ)である。だから、多種多様性を尊重するミラー氏が批判すべきは、言語の構造・機能的な問題に還元されるような原理的問題よりも、ベネディクトの議論の内容的な不備や解釈の妥当性等の具体的な問題だったのではないか。重要なことは、或る指摘がどのような意味でなされているのか、そのコンテキストである。ミラー氏とて、「体罰は名誉であって恥ではない⁴⁶⁾」と反論的に述べるとき、そのように述べる意味とコンテキストを説明したうえでそのように述べているのだから⁴⁷⁾、ベネディクトの研究もそうした姿勢で受けとめられればよかったのではないだろうか。「恥」という視座が、体罰の考察に

全く活用できないとは考えられないからである⁴⁸⁾。

こうした意味で、ベネディクトの研究を、「日本では多くのことが変化した⁴⁹⁾」から「誤りを正しておくことは重要⁵⁰⁾」といった指摘で退けようとするミラー氏の姿勢は強引である。そしてその強引さは、「文化主義」を批判するミラー氏の立場を必要以上に頑なにしているように見える。つまり、日本という特定のエリアの状況に迫ろうとしているにもかかわらず、「文化主義」に陥らないために「日本(人)は～」といった説明も避けなければならないという板挟み的な状況になり、そこからなんらかの結論的なものを出そうとしたときにフーコーの参照と「人類文化」という指摘に向かってしまったのではないだろうか。

おそらくこのことによって、ミラー氏の母国アメリカの体罰への理解も満足できないものになっている。すなわち、アメリカの体罰について論じた補論が、「アメリカにおける規律訓練の言説は、日本のそれと、さほど異なるわけではない⁵¹⁾」と締められていて、補論が付けられた理由がよくわからないのである。要するに「人類文化」ということなのだろうか。だとすれば、先にも触れた「日本の「体罰」と英語圏の「コーポラル・パニッシュメント」には違いがあるし、日本人とアメリカ人はいくつかの重要な点で大きく異なるのも事実である⁵²⁾」というミラー氏の指摘はどこへ行くのか。「文化主義」を厳しく批判しながら、同時に「違いがある」とも言い、そうかといってその点が明確に示されるわけでもないという議論の調子には、「私しか本当のことを知らない」と言われているような気分さえしてくるのである⁵³⁾。

*

第6章終盤から終章はさらなる迷走を見せている。第6章終盤では、文科省の体罰定義の曖昧さへの批判が始まり、フーコーを参照したそれまでの議論からの整合性が理解できない。不分明な論述のため評し難いのだが、評者なりにミラー氏の意図を推察するならば、フーコーの権力論によって言説というものの威力を示し、それを根拠に体罰論議のこれまでの混乱の原因を、文科省の体罰定義に求めようとしたのかもしれない。

もし文科省が、体罰という用語が何を意味するのかを明確にしていたなら、そしてもし、学校教育法を破っていることを認めている教師全員を粛々と罰

していたなら、「体罰」という用語が、ここまで多義的となることは、おそろくなかったであろう⁵⁴⁾。

体罰を用いていた者に、文部科学省は有利な解釈を与えてきたようだ。文科省が最近、体罰を「児童虐待」であると再定義したのは、この定義上の混乱への対応であると思われる。政府は、もはやこの強力な用語をコントロールできないために、完全に削除するという結論を下したのではあるまいか⁵⁵⁾。

憶測が過ぎるように思うが、いずれにせよ、「文科省がきちんと定義さえしていれば体罰問題はもっとすっきりしていたはずだった」という極めて単純な社会認識が示されており、それは体罰言説の「多重音声性」「多元性」というミラー氏の視座と矛盾している。文科省の定義だけは、体罰言説の多様性には含まれないということなのだろうか。そうだとすれば、その理由が述べられるべきだろう。ミラー氏が言いたいことはそうではなく、「行政機関がしっかりすべき」ということなのかもしれないが、それは人類学的立場ではないだろうし冷静な意見でもないだろう⁵⁶⁾。なぜなら、運用の仕方によっては曖昧な定義の方があらゆる現実をカバーできるとも考えられるからである⁵⁷⁾。

あるいは、厳密で適切な定義なるものが仮に示されたとしても、現実の社会生活がそれだけに従って統制されることはあり得ない。私たちの生活は多様だからである。しかし、言語活動を放棄できるわけでもない。だから、「言語の問題であり言語の問題ではない⁵⁸⁾」ということが、体罰・暴力問題の難しさの核になる。「定義をきちんとして体罰だけ取り締まればいい」とミラー氏は言うだろうか。しかし、それは実際には学校生活やスポーツ指導そのものを監視することであり、必要以上の負荷を現場にかけることにもなり得るのだから、もし本当になされるのであれば、各実態に即して慎重に考えられるべき事柄である⁵⁹⁾。

続く終章「『暴力的文化』の神話」は、それまでほとんど言及のなかったピンカー(Steven Pinker, 1954-)の『暴力の人類史⁶⁰⁾』が持ち出され、厳しく批判されている。終章である以上、それまでの議論が振り返られ、何が明らかにされたのがまとめられるべきであり、それまでほとんど言及のなかった研究が出てくることに違和感を覚える。いずれにせよ、ミラー氏が終章で述べたいこともまた「文化主義」批判である。

「文化」は、単独犯たりえない。なぜなら、他のいかなる国の「文化」と比べても、「日本文化」がより暴力的であったり、なかったりするような、日本人に生まれつきそなわっているものなどないし、「日本流の方法」のなかに「伝統的」なものなどはないからである。ピンカーのような研究者には認めがたいことだろうが、暴力の根源を説明するのに依拠しうるような「人間性の本質」などは存在しないし、ある場所においてよりも別の場所でのほうが暴力が起きやすくなるような、なんらかの「文化の本質」もまた、ありはしないのである⁶¹⁾。

ミラー氏はこのように言うのだが、ピンカーへの批判はあまりに粗雑である。

ピンカーは、『暴力の人類史』で暴力の歴史を描いている。その「暴力の人類史」とは、暴力の減少の歴史である。ピンカーは、ホメロスの時代の暴力風景の描写や統計データ等の証拠を駆使し、暴力が歴史的に減少してきたことを示している。具体的には、「リヴァイアサン」としての統治機構の出現⁶²⁾、マナー・エチケットの発達、婚姻制度、重商主義等のさまざまなファクターが挙げられている。つまり、ピンカーは「暴力の根元を説明するのに依拠しうるような「人間性の本質」といった唯一のファクターを想定する」といったことはしていないのである。ピンカーの表現で言えば、暴力の「外生的な (exogenous) 要因⁶³⁾」への着目が、そこにはある。それは、説明しようとする現象そのものから影響を受けることもある「内生的な (endogenous) 要因」に着目することで「社会の暴力性が低減したから暴力が減った」などといった「堂々めぐりの理屈でお茶を濁さないための戦略」だとされている⁶⁴⁾。こうしたピンカーの研究から「文化主義」批判を引き出してくるのはあまりに強引である。また、ミラー氏はピンカーが暴力を定量化し、多種多様な暴力 (言説) を描いていない点を「視野狭窄」だと批判するのだが⁶⁵⁾、定量化という手法は、あくまでもピンカーの研究目的との関連で評価されるべき方法の問題であり、定量化それ自体が視野狭窄であるかのように批判することはナンセンスである。ベネディクトへの批判の際にも見られたが、ミラー氏には「文化主義」批判を打ち出すために強引な批判を行う傾向があると思われる。

*

以上のように、ミラー氏は体罰言説の検討という目的を設定し、第2章から第5章では基本的にはその方針に沿った論述を行っているのだが、第6章から突如として論調を変える。終章ではそれまでの「文化主義」批判が繰り返されているのだが、第6章の変調をカバーするものではない。こうした全体の流れに、評者は戸惑わざるを得ない。

さらに戸惑うのは、「日本語版への序文」である。そこには第2章から第5章に見られたような慎重さは見られず、体罰への反対姿勢が前面に出ている。「殴るという判断は、人間性というものについての誤った情報にもとづくものだ⁶⁶⁾」という強い調子や、「体罰というものは、「一見筋が通っていそうに見える」誤った論理へとわれわれを導き、それが子どものため (傍点ママ) である、と主張されるのである⁶⁷⁾」といった揶揄によって体罰が非難されており、体罰言説の分析を人類学の立場から行うことが表明されている本の序文とは思えない。

この点もミラー氏に直接訊ねたところ、「自己分析 (soul searching)」の結果、より個人的な立場から書きたいと考えたとのことだった⁶⁸⁾。原書の出版から本訳書の出版の間に多くの時間が経っており、意見や態度が変わることは当然あるだろう。それ自体はなんら問題ではない。しかしそうだとすれば、そのことが伝わるように議論は提示されるべきだったはずである。

だがそもそも、個人的価値観として体罰に反対することと体罰を慎重に考える議論を提示することとは、特に活字表現の場では、じゅうぶんに切り分けて行われ得るのではないだろうか。それもまた「自分自身を抑えること⁶⁹⁾」の具体的な努力の一つの仕方である。そもそも、「自己分析」の結果として「日本語版への序文」のような体罰反対の立場を書いたというミラー氏の回答は混乱的である。元来ミラー氏は体罰に反対していたのだから、その意味で「自己分析」の結果ということではないと思われるからだ。

「自己分析」の結果が体罰反対の表明になったというミラー氏の回答の裏側を邪推すると、本書でなされたような体罰の意味や効果を語る言説を扱うことをもしかするとどこかで体罰を肯定しているように感じていたのではないかと思われる。つまり、肯定的なものを書いてしまったから再び反対の姿勢を表明しなければならないと考えたのではないだろうか。もしそうだとすれば、「自分自身の先入見を脇に置いておく力を自分が持っていることに気づいた⁷⁰⁾」というミ

ラー氏の自己評価は、改めて「自己分析」される必要がある。体罰の現実を描く議論が結果的に肯定派に悪用されたり、否定派に「肯定するのか」と非難されることはあり得るが、体罰の現実を描くことそれ自体は肯定でも否定でもないのだから。

実は、ミラー氏は2009年に「さよなら、体罰」という日本スポーツ協会の特集に、「体罰に関する国際的動向」と題する短い論考を寄せている⁷¹⁾。そこでは、「体罰は進歩的ではないから学者の意見にもとづく「国際的コンセンサス」に則って日本の状況は変容させられるべきだ」とされていて、本書の本論とは似ても似つかぬ主張が示されているのだが、「日本語版への序文」とは近いところにある。こうして見ると、「日本語版への序文」は、そこで本論との整合性が説明されていないことも加味すると、「自己分析」の結果というよりも体罰反対の主張が単に揺れ戻ってきただけのように見える。そして実際のところ、体罰反対の主張がすべり込んでいような記述が実は本書の本論には散見されるのである。例えば、序章という早い段階で次のように述べられているのである。

文科省が、もっと断定的かつ厳密に体罰を定義し、既存の体罰禁止法の執行についてもっと入念かつ継続的に記録を残していれば、日本は子どもの権利向上におけるグローバルなパイオニアとなっていたかもしれないのである。しかし代わりに、これらの法的なあいまいさは、体罰という行為と、それを取り巻くおびただしい論争が継続することを許してきた。そのことが、教育的規律訓練の道具としての体罰の有効性と倫理性について、日本を他の多くの産業化された国々と同じく、むしろあいまいな状態に留め置いてきたのである⁷²⁾。

体罰問題の解決は、「グローバルなパイオニア」になるためではなく、それによって損なわれる心や命を可能な限り力を尽して減らすためになされるべきものであるが、「日本語版への序文」にも、ミラー氏は「日本人は、彼らもその住人であるグローバル化した社会そのものを変えることはできない⁷³⁾」と脈絡なく書いている。脈絡があるとすれば、体罰を否定するための理念としてのグローバリズムとのつながりである。そしてそれは、「さよなら、体罰」のときの「国際的コンセンサス」の言い換えなのではないだろうか。

いずれにせよ、「さよなら、体罰」からミラー氏の

体罰反対の立場はおそらく変わっていないのだろう。だから、それを抑止するストレスが、文科省批判や「グローバルなパイオニア」といった表現で解消されているのではないだろうか。各個人がそれぞれに体罰への意見を自由に持つこと自体はなんら問題ではないが、それこそが多様な体罰言説を生む根底的条件なのだから、意見表明と分析が整理されていないミラー氏の論述は自覚的なものとは言えない。その意味で、「強い自己規律⁷⁴⁾」への余地がミラー氏にはまだある。それは暴力研究が我々に求める非常に厳しい要求ではあるのだが⁷⁵⁾。

＊

表現や内容にやや異なる部分はあるが、第6章の変調と「日本語版への序文」の問題性について、評者は、「スポーツ文化研究会」（第46回：2021年9月18日）で行われた本書の合評会で報告した⁷⁶⁾。そこで言われたのは、第6章は出版社からの要求で書かれ、「日本語版への序文」は時間が無いなかで書かれたいわば突貫工事であり、そこを指摘されるとミラー本人も困ってしまう、ということだった。これには驚愕した。その事実もさることながら、そうしたコメントが返って来ってしまうことにも、である。本訳書は既に出版され、世に問われているのであり、その時点で著者や訳者にどのような事情があろうとも、それを知ることができない読者にとって、それは関係の無い話である。もし評者による上記の見解が的外れでないとすれば、評者と同じように困惑する読者は少なくないのではないだろうか。版が重ねられることがあれば、その際には一つの本としてのパッケージ性が整えられるべきである。

他にも振り返るべき意見や議論があった。最後に、そのいくつかに触れながら、その後評者が改めて考えたことを含め、今後検討されるべきポイントとして記しておきたい。

評者は、上述したミラーの姿勢の揺れの要因の一つとして、彼に、人間が暴力的存在であることへの理解が欠けている可能性を指摘した。その指摘に対するものだったかと記憶しているが、「暴力の根源性ということもわかるがスポーツとして体罰をなくしていくべき」といった旨のコメントが出された。そこでは「スポーツにおいて暴力はあってはならない」ということが、おそらく意味されていた。そうした類の表

現はスポーツの研究者からしばしば出される。体罰・暴力があってはならないのはその通りだが、しかし、にもかかわらず現実には発生してしまうのである。そのことを体罰の歴史は厭というほど示している⁷⁷⁾。「スポーツの空間を非暴力に」と目指し、どれほど計画したとしても、スポーツを行っているのは明らかに人間であり、その人間という存在は暴力性を有しているのだから、暴力のポテンシャルはゼロにはなり得ない。あまりにも当然のことだが、なかなか伝わらない点であることを、評者はこれまでの研究活動で感じている。そうした意味を込めて、当日の報告資料には、「暴力に抗する知性などと平気で言っているが、そんな具合に使われていては知性も暴力の一種に過ぎませぬ⁷⁸⁾」という小林秀雄の言葉を載せておいたが、伝わったのかどうかはわからない。

規律訓練とは、まさに人間という存在が暴力的であることから人類史的規模で要請されたシステムだと言えよう。規律訓練は、近代批判の文脈でその抑圧性が厳しく批判されるが、しかし、それを完全に捨ててしまえば我々はお互いの暴力性にむき出しで晒されることになる。「規律訓練とは別の新たな方法はないか」といった趣旨の質問を受けたが、評者に人類史的規模のアイデアはなかった。ただ、質問者と議論をしていると具体的な問題として出てきたのは人数規模だった。例えばスポーツ推薦によって大人数の部員を抱えている運動部は、特に大学には少なくない。人数が増えれば、集団秩序のコントロール不可能性はどうしても高まり、それに比例して体罰発生の可能性も高まると考えられる。

そうした観点から、評者は、「規律訓練がうまく作動していれば体罰は要請されない」と発言した。システムは偶然性を排除することでその自立的作動性を確保しているだけであり、人間の身体と行動（という名の偶然性）は常にその自立的作動性を脅かしている。そうしたせめぎ合いで秩序は成り立っているのだが、それが偶然性によって侵され、システムが綻んだとき、それは最小限にくい止められなければならない（偶然性を契機に体罰は起きるから未然に防ぐことが難しいのである）。そこで体罰が発生する可能性が高まる。システムが自立的作動性を失った以上、その場では人間が身を以ってシステム・秩序を補う他なくなる。そこで登場してくる身体は、我々の場合、日本人の身体である。そして、そのときに起きる体罰は日本人という身体において現れているのだから、そこにな

んらかの日本（人）性が表出し、我々がそれを感じとることは当然のことである。身体には、その国や地域の文化が織り込まれているからである⁷⁹⁾。

したがって、「ディシプリン（あるいはコーポラル・パニッシュメント）と体罰は違う感じがする」というコメントがあったことや、既に見たように、ミラー氏が特定エリアによる違いについてもらしていることは微妙な点だが、やはり重要なポイントであり、立ち入って考察されるべきである。その点を「文化主義」批判は論理によって飛び越すかもしれないが、「違い」を感じる我々の実感が否定されるべきではないし、そもそも否定され得ない。そして、我々のそうした実感こそが実は「文化主義」的説明の繁殖力の根源にあるものなのである。だから、適切な論点を取り出され、一定の妥当な解釈を得ておかなければ、我々は「文化主義」と「人類文化」の間で揺れ動くだけの不毛な状況から抜け出すことができなくなる。

ミラー氏は、「日本の文化が暴力的だと結論づけた例がある」ともらすのだが、日本の体罰の特徴として感じるのはその無茶さである。だから、彼に特に意図があったわけではないように思うが、フーコーが規律訓練（ディシプリン）における体罰を「軽い体罰（*châtiment physique léger*）⁸⁰⁾」と表現していることが我々にとって意味深長に見えてくる。ディシプリンの範囲では、体罰は「コーポラル・パニッシュメント」あるいは「軽い体罰」だが、それを逸する無茶・過激なものが<体罰>（あるいは単に「暴力」）という区別が仮にもできるだろうか。

日本の体罰の無茶さは違法性として強調されることが多いが、それを日本人の身体性の問題として見たとき、理解するための観点の一つに「ヤクザ性」がある。宮崎は、「市民生活に耐える力が無い」「公私の区別が無い」といった揶揄が込められた丸山眞男の「無法者」規定を裏返し、それを、「市民生活のルーティンに没しない」「荒っぽい仕事をいとわない」「私」を捨てている」といったかたちでヤクザ性の理解に応用している⁸¹⁾。体罰を行う指導者・教師に、法を侵してでも学校の秩序維持やいわゆる「ワル」との対峙という「荒っぽい仕事」に臨む姿勢を見ることができよう。また、体罰からは離れるが、平日休日と関係なく部活を行ったり、寮で選手・生徒たちと生活している指導者・教師の公私の境界はおそらく曖昧だろう。そして、暴力を許容するような指導者・教師と選手・生徒との関係性に、親分と子分のそのような雰囲気

を感じることもできるかもしれない。急いで付け加えるが、こうした解釈によって「だから体罰はだめなんだ！」と主張することは「体罰の考察」ではなく「価値の主張」であり、その思考は或る時点で止まってしまふ。肝心なことは、体罰という現象を通じての日本人の身体性の究明であり、その一つの観点としてヤクザ研究の参照があり得る、ということである。ヤクザ性の観点は、体罰のみならず運動部活動の日本特殊性の解明にも資すると評者はみているが、まだ研究段階にあるため改めて論究したい。

最後の最後に、出版社代表が自身の体罰体験を記している「共和国急便」という付録は余計だったのではないかということをつけ加えて終わりたい。そこには、いわば体罰への恨み節が書かれているのだが、日本の体罰に人類学的に迫ることがミラー氏の研究の肝心であったとすれば、この付録はむしろ上で指摘したミラー氏の変調の方に我々を誘導するかのような内容になっている。個人の苦い体験が軽視・否定されるべきでは無論ないが⁸²⁾、出版社代表にもそうした姿勢があるのを見ると、人類学といった構想とは全く別のねらいが本書の成立過程にあったのではないか、それを前面に出すことをなんらかの理由で避けるために人類学があくまでポーズとして取られているのではないか、などと穿った想像をさせられてしまうのである。

【引用・参考文献及び註】

- 1) 中澤 篤 史「図 書 紹 介：Aaron L. Miller 著『Discourses of Discipline: An Anthropology of Corporal Punishment in Japan's Schools and Sports』」『一橋大学スポーツ研究』第34号、2015年、71-75頁。
- 2) 本評の背景には評者のこれまでの暴力（論）研究がある。以下等を参照されたい。拙著『体罰・暴力・いじめ—スポーツと学校の社会哲学』青弓社、2019年。拙論「教育の暴力／暴力の教育—信じる力を信じて」『福音と世界』第76巻、第1号、2020年、18-23頁。拙論 "Body Facing Violence in Education: Critical Options from Somaesthetics" in Satoshi Higuchi, *Somaesthetics and the Philosophy of Culture: Projects in Japan*, Routledge, 2021, pp.93-113. 拙論「身体感性論を手がかりにしたスポーツと学校における暴力への対処—暴力批判への批判を添えて—」樋口聡教授退職記念論集・編集委員会（編）『身心文化学習論』創文企画、2021年、86-95頁。
- 3) アーロン L. ミラー（石井昌幸ほか訳）『日本の体罰 学校とスポーツの人類学』共和国、2021年、47頁。（以下頁数のみ表記する）
- 4) 62頁。
- 5) 拙著、86-89頁。
- 6) 260頁。
- 7) 261頁。
- 8) 230頁。
- 9) 58頁。
- 10) 75頁。
- 11) この点に関して、ミラー氏の研究を紹介しながら、日本の体罰は外国人の目から見ると恐ろしくて恥ずかしいものであり、ミラー氏が日本社会に反省を迫っているという中澤氏の指摘は、ミラー氏の研究姿勢を誤解している（中澤篤史『そろそろ、部活のこれからの話をしませんか 未来のための部活講義』大槻書店、2017年、154頁）。ミラー氏は、「日本人が子どもをどのように育て、教育していくべきかを、非日本人の立場から示す立場に立つべきではない」（93頁）と明記している。
- 12) 81頁。
- 13) 81頁。
- 14) 60頁。
- 15) 86-92頁。
- 16) ミラー氏は、「参与観察は人類学者にとって有効なデータ収集となるが、体罰のようなデリケートな問題を研究するには、フィールドワークでの観察は別のデータ収集法（たとえば、文献調査や言説分析）によって補われる必要がある」と述べている。88頁。
- 17) ただし、「埼玉教育塾」（後に「プロ教師の会」）の中心人物であった諏訪哲二の言論を見ていない点は不足として指摘しておきたい。諏訪は、現場の教師としての自身の経験等に基づき、体罰のみならず様々な教育実践のアクチュアリティーを徹底して考えている。例えば以下等がある。諏訪哲二『反動的！学校、この民主主義パラダイス』JICC、1990年。同『「管理教育」のすすめ』洋泉社、1997年。
- 18) 274頁。
- 19) 290頁。

- 20) 280頁。
- 21) 以下はミラー氏からEメールで送られてきた回答の部分抜粋である。"I decided to use Foucault hoping that it might help scholars like yourself clarify their own positions, if nothing else." (2021年12月7日) なお、やりとりの内容を本評で紹介することについてはミラー氏本人の承諾を得ている。
- 22) 284-285頁。
- 23) 具体的な研究や文献をここで全て挙げることはできないが、体罰研究について言えば、例えば寺崎弘昭は、『イギリス学校体罰史―「イーストボーンの悲劇」とロック的構図』(東京大学出版会、2002年)の中で、フーコーを度々参照しながら体罰を考察しているし、教育言説の研究について言えば、広田照幸の『教育言説の歴史社会学』(名古屋大学出版会、2001年)の序文では、「教育社会学や社会学でも、Ph・アリアス、M・フーコーの摂取や、社会構築主義 (social constructionism) やエスノメソドロジーの流行を背景に、「教育の語られ方」の分析が高まっている」(3頁)とされている。なお、前者はミラー氏の「精選体罰関連研究リスト(1979～2008年)」(332頁)に、後者は「参考文献」(370頁)で挙げられているものである。
- 24) 拙論「運動部活動における体罰の意味論」『体育学研究』第61巻・第2号、2016年、407-420頁。
- 25) それは、運動部活動におけるいわゆる「部内規則」や体罰の「苦痛」等といった具体的な事柄を指摘することによってなされた。詳しくは同上を参照されたい。
- 26) 86頁。もっとも、ミラー氏が批判する「理論先行型アプローチ」とは、体罰の害悪や根絶を強く訴えるいわば前のめりの体罰研究のことであるが、害悪や根絶を訴えること自体が問題なのではなく、前のめりの姿勢が体罰の理解を妨げる点に問題がある。ミラー氏のフーコー参照も、そこまであからさまではないにしても、そうした姿勢に陥ってしまっているように見える。
- 27) 77頁。
- 28) 58頁。
- 29) ミラー氏が挙げている体罰事件を見ると(334-338頁)、彼の関心の中心は過激な体罰の方にあるように思われる。しかしミラー氏の実際の議論は、体罰が意味・効果のあるものとして語られている言説が主に対象になっている。そのことが、ミラー氏の姿勢を不安定にさせているように感じられる。
- 30) フーコーの諸著作だけでなく以下も参考にした。加賀乙彦・中村雄二郎「現代人のディテール」中村雄二郎『精神のトポス』青土社、1979年、53-60頁。
- 31) 拙論「The Nature of Sports Groups in Japan: Or Its Relation to Violent Phenomena」『学習開発学研究』第12号、2019年、51-60頁。この論考では、フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) とジラルル (René Girard, 1923-2015) の議論を用いてスポーツ集団の集団構造とその内実としての人間関係の構造を明らかにし、そこからフロイト理論に多くを負っている土居健朗の『「甘え」の構造』を参照し、日本のスポーツ集団における暴力の温存を、「甘え」のネガティブな亢進として解釈した。
- 32) 58頁。
- 33) 58頁。
- 34) 229頁。
- 35) 304頁。
- 36) 40頁。
- 37) 273頁。
- 38) このことに関する議論を、拙論「あらためて、暴力の社会哲学へ―暴力性の自覚から生まれる希望」(『 α -synodos』Vol.273, 2020年)で行ったことがある。そこで扱ったのはAlexander Rosenbergの*Philosophy of Social Science* (Routledge, 5th ed., 2015)で、特に問題にしたのはそのChap.3 "The Explanation of Human Action" (pp.35-54.)だった。
- 39) 50頁。
- 40) 58頁。
- 41) 53頁。
- 42) 柳田國男・折口信夫・石田栄一郎「民俗学から民族学へ―日本民俗学の足跡を顧みて」柳田國男『日本の民俗学』中公文庫、2019年、303・340-343頁。
- 43) 同上。
- 44) 体罰とは異なる話題だが、昨今の研究費申請のあり方は危機的である。申請時に研究計画を示すために「何が明らかにされるのか」までを申請者

が書かなければならないことがあるのだが、そもそも、それがあらかじめわかっているのであればその研究が行われる必要性はない。無論、意識や思考の域に入っていないという意味での「わからないこと」まで我々は問うことはできず、そのことを考えれば、我々は問う時点で回答の方向性のようなものをどこかで予感的に察知していることはあり得る。ただし、例えばミラー氏や評者のように、体罰を研究している研究者が体罰問題の解決に有効だと考えられる対策を研究として実施するとしても、その有効性の保証は実施前にはどこにもなく、やってみなければわからない。だから、その対策によって何がどうなってどういう結果や課題が得られるなどということも事前に明らかになっているはずがないのである。そして、さらに危機を感じるのは、少なくない研究者が研究という営みを申請書的枠組みで捉え始めてしまっている風潮である。そうした風潮の中で、研究という営みが強く、太く、活気づいていく可能性は低い。

45) 59頁。

46) 56頁。

47) 56頁。

48) 樋口は江森一郎の『体罰の社会史』（新曜社、1989年）に触れながら、次のように述べている。「体罰の目指すところが「身体的」という表面にあるのではなく、精神や意志などの内面的なものにあり、体罰以外の方法で精神・意志の屈服や恥の懲罰が実現されるのであるとすれば、体罰は姿を消してもよいことになるだろう。江戸期の日本において、西洋におけるような体罰がほとんど見当たらないとすれば、それは体罰以外の方法で精神・意志の屈服が実現可能なシステムが作動していたとも考えられるのではないか。人と人との関係に重きを置く恥の文化を有すると言われる日本においてはその可能性が高い。逆に、体罰が一向になくならないどころか増える傾向にあるとすれば、それは内面的な恥の文化が空洞化していることの徴と考えることができるだろう」。恥の文化は空洞化しているだけであり、それ自体が消滅しているわけではない。樋口聡「ミーメシスの視点からみた教育と暴力」樋口聡・G.ゲバウア・R.シュスターマン『身体感性と文化の哲学』勁草書房、2019年、91-92頁。

49) 59頁。

50) 59頁。

51) 329頁。

52) 229頁。

53) ただ、この点はたしかに実際には非常に難しい。違いや文化性のような微妙な事柄には、言葉にしなければ曖昧なままであり、逆に言葉にしまうとこぼれ落ちてしまうような扱い難い性質があるからである。

54) 293頁。

55) 293頁。

56) 或る問題をリベラルな立場から批判しているにもかかわらず、行政や権力に力の行使を委ねようとする見解を示すこうした姿勢は、例えばコロナ禍の感染症対策をめぐるでも露呈しており、昨今のリベラル派の倒錯として問題にされるべきである。

57) これはいじめ対策では実際に起きており、現場に影響が出ている。詳しくは以下を参照されたい。神内聡『学校弁護士 スクールロイヤーが見た教育現場』角川新書、2020年、42-46頁。

58) 拙著、39頁。

59) こうした考慮がなされないことが、先に言及したリベラル派の倒錯の根源にあるのではないだろうか。そうした問題性に対し、体罰言説の多種多様性を受け入れ、仔細に検討しようとするミラー氏の姿勢は距離を保つことができただけに残念である。

60) スティーブン・ピンカー（幾島幸子・塩原通緒訳）『暴力の人類史（上・下）』青土社、2015年。（Steven Pinker, *The Better Angels of Our Nature: Why Violence Has Declined*, Viking, 2011.）

61) 308頁。

62) ちなみに、ピンカーは「リヴァイアサン」が「最も一貫した暴力軽減因子かもしれない」としている。ピンカー、前掲書（下）、552頁。（Pinker, op.cit., p.680.）

63) 同書（上）、15頁。（Ibid., p.xxii.）

64) 同上。

65) 298頁。

66) 12頁。

67) 12頁。

68) “It took some serious soul-searching before

I realized that I wanted to write from a more personal place. By then, the English version of *Discourses of Discipline* was already published. And, of course, I wrote the “Preface” to the Japanese translation much more recently, after I had done that soul-searching.” (ミラー氏からのEメールによる回答の部分抜粋：2021年12月7日)

69) 62頁。

70) 62頁。

71) <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/sportsjournal2009winter.pdf> (2022年2月22日取得)

72) 66頁。

73) 13頁。

74) 86頁。

75) 評者は、暴力研究に従事するなかで自分の身に起きていることを告白したことがある。以下を参照されたい。「体罰・暴力に向き合うとはいなることか—あるいは、平和を願う魂について」『体育哲学年報』第50号、2020年、38-43頁。

76) 会にミラー氏の出席はなく、欠席裁判かのように感じたので、同会幹事の尾川翔大氏(日本体育大学)にお願いし、中継していただいた結果、ミラー氏とのやり取りが実現した。尾川氏への謝意をこの場を借りて表す。

77) この厳しい現実に対しては、評者は、究極には現場との協働による個別対応がなされるより以上のことはないと考えている。その立場からも体罰の言説や状況の多種多様性を見つめるミラー氏の姿勢を評価していただけない、終盤の変調は残念である。ちなみに、具体的な活動として、加藤敦志氏(国際バレーボール連盟)を中心とした「キレたらLINE」という取り組みに関わっている。以下を参照されたい。<https://thecultivator.jp/content/2022/01/13/1908/> (2022年2月22日取得)

78) 小林秀雄『わが人生観 知性と感性』大和書房、1969年、70頁。

79) こうした指摘はいわゆる「しぐさ」の文化性理解のためによくなされるが、認識の中で体罰・暴力が価値的に閉め出されているとこうした応用がきかない可能性がある。註38で触れた拙論では、そのことを社会科学の正当化の問題として(批判的に)指摘している。

80) ミシェル・フーコー(田村俣訳)『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社、1977年、182頁。(Michel Foucault, *Surveiller et Punir Naissance de la Prison*, Gallimard, 1975, p.210.)

81) 宮崎学『ヤクザと日本—近代の無頼』ちくま新書、2008年、7-12頁。

82) 評者にも体罰の苦い体験がある。拙著、19-25頁を参照されたい。

(受付日：2022年2月24日)